



確たるもの

えと文

秋田直躬

明るい、暗い現象とは別に、又、旅先での初めての出会い、身近に見慣れているかの区別なしに、自然が突如、眩しく輝かしい存在となって私に迫り、包み込み、私を虜にしてしまうことがあります。それは私にとって確たるもの、屹然としたものです。それは説明しつくせないものですが、ほんの僅かでも絵筆でとらえたいと希うものです。

この何かに打たれるような感覚はキャンバスを広げている時よりも、授業中であったり、車を運転している時であったり、時には会議中に窓の外を眺めている時であったりします。この絵も初夏の快晴の昼前、生徒の写生を見回っている時でした。こんなに空は青く明るかったのか。しかも光を溶びたチャペルの屋根は白い輝きとなって青空と等しく、くっきりと打ち震えていました。地面も含めてその場の全てが音の無い世界でした。

優柔不断で手間どっても、私にとって確たるものを僅かでも描きとりたいのです。

(高等学校教諭)